

— 降誕祭聖体礼儀 —

いつもと違うところ

— 単音 —

---始まりから大連祷までいつもと同じ---

第1 アンティフォン 第110 聖詠

ソロ 附唱、救世主よ、生神女の祈禱に因りて我等を救ひ給へ。

右 附唱 救世主よ、生神女の祈禱に因りて我等を救ひ給へ。



救世主や 生神女の祈禱によって、我等を救いたまえ

ソロ 第一句、主よ、我心を全うして爾を讃榮し、爾の悉くの奇跡を伝へん。

左 附唱 救世主よ、生神女の祈禱に因りて我等を救ひ給へ。

ソロ 第二句、義者の集議の中、及び会の中に於て主の所為は大なり。

右 附唱 救世主よ、生神女の祈禱に因りて我等を救ひ給へ。

ソロ 第三句、凡そ之を愛する者の為に慕ふべし。救世主よ云々

左 附唱 救世主よ、生神女の祈禱に因りて我等を救ひ給へ。

ソロ 第四句、其の所為は光榮なり、美麗なり、其義は永く存す。

右 附唱 救世主よ、生神女の祈禱に因りて我等を救ひ給へ。

☆ 光榮、今も、

両方 附唱 救世主よ、生神女の祈禱に因りて我等を救ひ給へ。

---小連祷---

第2 アンティフォン

第110 聖詠

ソロ 附唱、童貞女より生れし神の子よ、我等爾に「アリルイヤ」を歌ふ者を救ひ給へ。

右 附唱 童貞女より生れし神の子よ、我等爾に「アリルイヤ」を歌ふ者を救ひ給へ。



ソロ 第一句、神を畏れ、其の誠を極めて愛する人は福なり。

左 附唱 童貞女より生れし神の子よ、我等爾に「アリルイヤ」を歌ふ者を救ひ給へ。

ソロ 第二句、其の裔は地に力あり、正直の者の族は祝福せられん。

右 附唱 童貞女より生れし神の子よ、我等爾に「アリルイヤ」を歌ふ者を救ひ給へ。

ソロ 第三句、富と財とは其家にあり、其義は永く存す。

左 附唱 童貞女より生れし神の子よ、我等爾に「アリルイヤ」を歌ふ者を救ひ給へ。

ソロ 第四句、正直の者の為に光は闇冥の中に出づ、彼は慈あり恵ありて義なる者なり。

両方 附唱 童貞女より生れし神の子よ、我等爾に「アリルイヤ」を歌ふ者を救ひ給へ。

つづいて「光栄」、「今も」、「神の独生の子ならびに言よ」

神の独生の子ならびに言^{ことば}よ

死せざる者にして、我等を^{すく}救はん為に^{あまん}甘じて 聖なる生神女、永貞童女マリヤより 身を取り、

性を^か易えずして 人と為り、十字架に^{くぎ}釘うたれ、

死を^{もつ}以て 死を踏み破りし ハリストス神よ、

聖^{せい}三^{さん}者^{しや}の一^{いつ}として、

父 及び 聖神^{せいしん}と共に 讚^{さん}榮^{えい}せらるる主よ、我等を 救い給え。

---小連祷---

第3 アンティフォン

第 109 聖詠

誦經者 (第一句)、主我が主に謂へり、爾我が右に坐せよ。
(讃詞、第四調)



ハリストス 我が神^{かみ}や、 爾の降誕は世界に知恵の光を照らせり
これによって星に 勤むるものは、 星に 教えられて、
爾義の日を 拝^がみ、 爾上よりの東を 覚^されり。
主や、光栄は 爾に帰す。

誦經者 (第二句)、我が爾の敵を爾の足の台と為すにいたれ。
(讃詞、第四調) **ハリストス我が神よ**

誦經者 (第三句)、主はシオンより爾が能力の杖を遣さん、爾は其敵の中に主ため可し。
(讃詞、第四調) **ハリストス我が神よ、**

誦經者 (第四句)、爾が能力の日に於て、爾の民は聖なる美麗を以て備へられたり。
(讃詞、第四調) **ハリストス我が神よ、**

小聖入

(詠) 来れ ハリストスの前に 伏し拝まん、神の子、童貞女より生まれし主や、我等 爾に「アリルイヤ」を奉る者を 救い給え、



来たれハリストスの まーえに 伏^ふしおがまん
かみの子 童貞女より 生まれし 主や、
爾^{なんじ}にアリルイヤを 奉^{たてまつ}るものを すくいたまへ。

トロパリとコンダク (4 調)



ハリストス 我が神 ^{かみ}や、 爾の降誕は世界に知恵の光を照らせり
 これによって星に 勤むるものは、 星に 教えられて、
 爾義の日を 拝 ^{がみ}がみ、 爾上よりの東を 覚れり。
 主や、光栄は 爾に帰す。

♪ 光栄は父と子と聖神に帰す、今も何時も世世にアミン<コンダク 3 調>

<イコス省略>



い い ま— 処女 は いま 処女 は え— い—
 ざいの 主— —を—生む 主—を—生む
 地— — — —は 地—は のせがた—きものに
 ほ—ら—を—献ず ほら—を—献ず 天
 のつか—い 天 のつか い ぼくしゃ—とと

も に ほ - め - う - たう ほ め - う - たう

は か - せ - は は - か せ は ほ - し に し た がう

て た - び - - - す る た - び - す る

け だ し わ れ ら - - の た め に 永 - 久 - - の

か み み どり ご と し て う ま れ た り み どり

ご - と し て う ま れ た - り

ハリストスによって洗を受けしもの

(聖なる神の代わり)

ハリス トス に ^よ依って ^{せん}洗を 受けし もの

ハリス トスを ^き衣た - り ア リ ル イ ヤ

3回繰り返す

光栄は父と子と聖神に帰す、 いまも何時も 世 世に アミン。

ハリス トスを ^き衣 た り、 ア リ ル イ ヤ。

ハリストスに依って洗を受けし者、もう一度

ポロキメン

誦経者 至上者よ、願はくは全地は爾に叩拝し、爾を歌ひ、爾の名に歌はん。

右 至上者よ、願はくは全地は爾に叩拝し、爾を歌ひ、爾の名に歌はん。



誦経者 句、全地よ、神に歎びて呼び、其名の光栄を歌ひ、光栄と讃美とを彼に帰せよ。

左 至上者よ、願はくは全地は爾に叩拝し、爾を歌ひ、爾の名に歌はん。

誦経者 至上者よ、願はくは全地は爾に叩拝し、

全員 爾を歌ひ、爾の名に歌はん。

使徒の誦読 はガラティヤ書 209 端。

期満つるに至りて、神は其子を遣し、彼は女より生れ、律法下の者となれり、律法下の者を贖ひ、我等をして子たるを得しめん為なり。且爾等子たるに由りて、神は爾等の心に其子の神、「アウワ」父と呼ぶ者を遣せり。故に爾既に僕ならず、乃子なり、若し子ならば、イイススハリストスに由りて神の嗣なり。

「アリルイヤ」、第一調、

1 調



諸天は神の光栄を傳へ、穹蒼は其手の作為を誥ぐ。

句、日は日に言を宣べ、夜は夜に智を施す。

福音經の誦読 はマトフェイ三端。

イロド王の時、イウデヤのウィフレエムに生まれしに、視よ、博士数人東よりイエエルサリムに來りて曰く、生れるイウデヤ人の王は何処に在るか、蓋我等其星を東に見たれば、彼を拝せん為に來たり。イロド王之を聞きて心騒げり、イエエルサリム挙りて亦然り。乃凡の司祭長と民間の学士とを集めて、彼等に問へり、ハリストスは何処に生るべきか。彼等曰へり、イウデヤのウィフレエムに於てす、蓋預言者に因りて斯く録されたり、云く、イウデヤの地ウィフレエムよ、爾はイウダの諸郡の中に於て少しとせず、蓋爾より我が民イブライリを牧せんとする君は出でんと。是に於てイロド密に博士を召し、詳に星の現れし時を問ひ、彼等をウィフレエムに遣して曰へり、往きて、細に嬰兒の事を尋ね、に遇はば、我に告げよ、我も往きて彼を拝せん為なり。彼等王に聞きて往けり、視よ、嘗て東に見たる星は彼等に先

だちて行き、遂に嬰兒の在る所に至りて、其上に止まれり。彼等星を見て喜に勝へざりき。乃家に入りて、嬰兒の其母マリヤと偕に在るを見、俯伏して彼を拝し、其實盒を啓きて、之に禮物を献じたり、即黄金、乳香、没薬なり、既にして夢の中に、イロドに返る可からずとの黙示を得て、他の途より其本地に帰れり。

--- 重連袴、ヘルビムの歌、信経、親しみの捧げものまで、いつもと同じ---
「常に福」に代えて

イルモス第9歌唱

第9歌頌 附唱



わがたましいよ、天軍より尊貴光栄なる 童 貞 女

至浄なる 生神女を 讃めあげよ

われ 奇異にして 至栄なる 秘みつをみる

ほらは 天- となり 童貞女は ヘルビムの 宝座となり

かいばぶねは 容れ難き ハリストス 神の 臥し給う置き所となれり

我等歌いて 彼を ^{あが}崇め ^ほ讃 - む

または

常に福に代えて(ズナメニイ・チャントから)

Sputnik psalm

我 が た ま し い よ 天 軍 より 尊 貴 光 栄 な る

童 貞 女 至 浄 な る 生 神 女 を ほ 讃 め あ げ よ

わ れ 奇 異 に し て 至 栄 な る 秘 密 を 見 る

ほ ら は 天 と な り 童 貞 女 は ヘ ル ビ ム の 宝 座 と な り

か い ば ぶ ね は 置 き が た き ハ リ ス ト ス か み の

置 き ど こ ろ と な れ り わ れ ら う た ひ て

か れ を あ が め 讃 む

領聖詞

(第 110 聖詠)

主は其の民に救を遣せり、「アリルイヤ」

主 - は そ の た み に す く い を つ か わ せ - り